

『朝日ジャーナル』一九六一年十月一日（朝日新聞社）

若い世代の役割とは

『青年の問題』 岩波講座『現代教育学』第一六巻

岩波講座『現代教育学』は義務教育を直接の対象としているが、その中にこの『青年の問題』

を一巻として設けたのは、どういう理由によるものかを、執筆陣の中心人物である宮原誠一氏が次のように述べている。

そもそも小・中学校の教育は明日の青年をつくることを目的とするものではないか。したがって小・中学校の教育が評価されるのは、その教育を受けた子どもが青年になったとき、その教育をどのように生かしているか、いまいかによってである。だから教師は青年をもっとよく見なくてはならぬはずである。ところが、そういうことが最も欠けているのが、現代の教育の最大の弱点のひとつである、と

いのである。

明日の教育計画の地盤

つまりこの書はひとつには小・中学校の教育を評価するものとして青年の問題を取り扱っているが、同時に、それによって明日の教育計画を教師が考える地盤を与えようとしているのだということができよう。

執筆は清水幾太郎、宮原誠一氏などをとりまく一三人の人によつてなされているが、いずれも同志ともいふべき人々で、しかも、これらの共同執筆者全員の参加の下に、執筆プランの討議がかさねられたから、全編が一つのイデオロギーによってつらぬかれている点は見事なほどである。執筆者の意気込みがう

かがわれる。

第一に清水幾太郎氏が、この一巻の象徴ともいふべき「現代における青年の問題」を取り扱っている。この論文は青年にとつてはまことに甘いささやきである。二〇世紀の後半にはいつて世界にさまざまな問題が起つたが、現代における青年の問題という角度から眺めると、無条件で選び出して来るのはキューバ革命である。それは青年の事業を感奮興起せしめる。

氏によれば古来ほとんどすべての革命は青年の事業である。このことは一般に革命が、青年の本質と深い関係を持っていることを暗示するものでなければならぬ。青年は人生における危機の時代である。その本質から青年は自分の危機を通して社会の危機を受けとる。革命における青年の役割は、したがって青年という主体の優位というところにある。これが清水氏の論旨中核である。

清水氏はいふ。キューバ革命がブルジョア民主主義革命か、

社会主義革命かという外からの規定は、キューバ革命をなしたとげた青年たちにとっては意味をなさない。一九二八年のコミンテルン大会における革命の分類は今も生きているが、それは、社会主義革命は資本主義の高度に発達した国にだけ許されるものであり、そうでない国を、とりわけ植民地に対してはまずブルジョア民主主義革命、次に社会主義革命という方式しか認めない。一九六一年の帝国主義日本についても「共産党は依然として民族民主革命と、社会主義革命という二段階方式を主張している有様である。しかしキューバの青年はこれを全く無視して、主体的に「キューバ社会民主主義共和国」を宣言した。ここに新しい世代のもつ本質的な役割がある。

新しい世代は古い遺産と重荷をはねとばして全く独創的に動く。古い世代は社会主義を信ず

るかぎり、ソビエトを信じなければならぬと考える。しかし青年はそんなことはない。何物にもとらわれず、信ずるものを実現してゆく。こういう青年がキューバの青年でありその同時代者たちがフランスにもおり、ソビエトにもいる。全学連は日本の社会で孤立しているように見えるが、世界的に見ると孤立してはいない。全学連の青年たちもまた、革命をなすとげる可能性をもつ青年たちである。

清水氏はこういうように現代における青年をみている。

こうした青年に寄せる大人の期待はいつの時代でもなかったわけではない。ある意味では大人のもつ夢であろう。しかしそれが甘い夢にとどまらなければ幸いであるが、さて、そういう期待を寄せて、次に多くの青年たちが現代青年の生活や学習、さらにそれを成立させている歴史的背景を分析する。清水氏のような期待をもって見たとき、青年自身に、またそれをとりま

く社会にどのような問題があるであろうか。

まず「青年の生活と問題」の章においては、「進学と就職」(小川利夫)の項で、中学校教育に對してこの問題がマイナスとなつていくかを述べている。ここでは高校進学がすでに国民の最低限の要求としてあるにかかわらず、権力および支配階級がそれを否定するかのとき方策をとっているのが問題とされる。

「労働」(高木督夫・井上和衛)では、勤労青年の職場と、そこにおけるあり方が問題とされる。労働青年に関しては、主として大企業と中小企業の賃金格差に象徴される問題をめぐって、独占資本と権力の側の分裂政策とそれに対する労働青年の民主主義意識と階級意識が強調される。農村青年に関しては、独占資本の農民層分化と収奪の状況と農村青年の抵抗とが述べられる。「生活意識と生活態度」(香内三郎・木下春雄)の項では、これも労働青年と農業青年とにわ

けて現代青年が持っているといわれる、たとえばエゴイズム、あるいは仲間意識など二、三のものを解釈している。この章には他に「性」(前田嘉明)と「大衆文化」(田中清助)がある。一つは青年の内部からの問題、他は外のもの、ともに青年を動かす力となっているものである。後者では大衆文化が独占資本の側にあるもので、これと戦うことが青年に期待されている。

次の章は「青年の成長と学習」である。ここでは「青年労働者」(北川隆吉)、「農村青年」(碓井正元)、「高校生」(津高正文)の三つの種類の青年がいかに成長しつつあるか、学習しつつあるか、またいかにすべきかについて述べられる。「青年労働者」では、学習が労働運動との全体的な関連でとらえられなくてはならなくなつて来ている。また青年は事実そうして新しいモラルを形成し無限のエネルギーを蓄積しつつあるという。「農村青年」もまた農地改革以

来の歴史的体験の中で、独占資本が復活し、その支配体制の強化に對して自衛策を講じ、これと積極的に對抗する運動の中で学習をなしつつある。

「高校生」は安保闘争の動きの中で、はじめて人間として、日本の青年として回生するような学習をしつつある。このような不安に結集されたエネルギーを今後どのように組織し発展させるかというところに、国民教育としての高校を正しく位置づけるものがあるとする。

次は「青年期教育の歴史」(宮原誠一・宮坂庄作)である。ここでは青年期教育の二重構造を中心として明治維新以来の日本教育を中等教育に関して分析している。絶対主義政府の成立以来、民衆を疎外した中等教育の伝統は、今日に至るまで依然として継続している。ここに公教育不信の根源がある。だから過去においては、公教育自体を改革するという動きよりは、それに背をむけたところで「独立勤

「労青年教育」がいとなまれた。おだやかな青年教育の努力さえもが、人間的尊重のいとなみであるがゆえに弾圧をさけられなかった。これが日本の青年教育の歴史である、というのである。

最後に宮原誠一氏の「青年期教育の再編成」がある。これは後期中等教育の改造の問題を中心としている。それは完全な中等教育をすべての者にということである。科学教育、技術教育、労働教育、芸術教育、体育、道徳教育の総合された完全な後期中等教育を高等学校に要求するとき、はじめてすべての青年の高校となるというわけである。

あまりにも単色的

以上簡単であるが忠実に紹介したつもりである。しかしこうみると余りに単色ではないか。一編の詩というにふさわしい。一部の青年教師に対するプロパガンダとしてはよいかも知れないが、果たして大衆教師が行けるだろうか。小・中学校

教育の具体問題とのハーモニーを考えるべきではないか。正直のところ私も途中で何度も放棄しそうになった。単色メロデイがくりかえし出すぎるからである。これでは大衆から離脱するのではないか。そういうところで革命青年が待望されたら、青年が迷惑するのであるまいか。

(A5判 三四三ページ三八〇円
岩波書店)

国立教育研究所
教育内容研究室長 矢口 新